



大田市教育魅力化プロジェクト

令和2年度活動報告書

大田市教育委員会
教育魅力化推進係



「教育の魅力化」とは

この報告書は、大田市が進めてきた「教育の魅力化」についての報告書です。教育の魅力化は、島根県において少子高齢化が進み、県立高校の定員割れによる統廃合が問題化した時から始まりました。「県立高校」という枠を飛び越え、市町村がその地域における高校の価値を改めて認識し、地域や行政、そして高校の人々が危機感を持って高校を「魅力的な学びの場」へと変えていきました。「魅力的な学び」とは、学校を社会に開き、多様な人びとと子どもたちが接する機会を作り、地域社会の中で子どもたちがチャレンジする機会を作り出す、というものです。これはあくまで一例ですが、AI時代の社会や仕事の変化にも対応する「新しい学力観」に根ざした島根の取組は、全国的に注目され全国から多くの子どもたちが「しまね留学」を始めています。現在、島根県では、高校にとどまらず、小・中学校や幼児教育の魅力化についての取組も始まっています。

子どもたち一人一人に、自らの人生と地域や社会の未来を切り拓くために必要となる「生きる力」を育むため、学校・家庭・地域がその目標を共有し、協働を図りながら、教育をよりよいものに高めていくこと。

「しまね教育魅力化ビジョン」島根県教育委員会 令和2年3月

「大田市の教育の魅力化」とは

大田市の教育の魅力化は、子どもたちにとって、教科書では学ぶことのできない、豊かな学びを提供することです。そして、子どもたちが大人になったときに「ここで学んでよかった」、保護者の方に「ここで育ててよかった」と感じてもらえたり、子どもたちが将来「大田で働きたい」「大田に関わっていきたい」と思ってもらえたりするような教育の実現を目指しています。

そうした教育を実現するためには、外から「全く新しい何か」をもってくるのではなく、それぞれの学校が地域ごとの特色に応じて取り組むことが求められています。そのため、教育のやり方に決まった答えはありません。学校・家庭・地域が連携して教育にあたることで、より豊かな学びを提供できるとともに、ふるさとに愛着をもつ人材の育成が可能となります。

大田市が教育ビジョンに掲げる、大田で育つ子どもたちの「生き抜く力」を育みながら、学校・家庭・地域が力を合わせて子どもたちの成長を支える土壌がより豊かになるよう取り組みます。

目次

大田市の教育魅力化について ▶ p.2

<地域資源を活かした教育の推進>

- ・大田高校 総合的な探究の時間 IT人材育成プログラム ▶ p.4
- ・邇摩高校 課題研究での伴走 ▶ p.5
- ・温泉津小 連歌を活かした温泉津の魅力発信 ▶ p.6
- ・大田西中 地域の未来を考えよう、石見銀山学習 ▶ p.7
- ・多世代対話型交流学習 ふるさと教材をネット上で学べるシステムの構築 ▶ p.8
- ・大田高校 おおだ共育共創ラボ ▶ p.9
- ・大田市山村留学センター コロナ禍対応オンライン事業 ▶ p.10-11

<環境づくり>

- ・大田高校 コンソーシアムの設立に向けて ▶ p.12
- ・邇摩高校 コンソーシアムの設立に向けて ▶ p.13
- ・小中学校 コミュニティ・スクールの設立推進 ▶ p.14
- ・社会教育 地域学校協働活動の推進 ▶ p.15

<縦の連携づくり>

- ・小中高 教員合同IT研修 大田西中 邇摩高生による出前授業 ▶ p.16
- ・保幼小 『大田市版スタートカリキュラム』策定について ▶ p.17

- ・市全体 おおだ教育の日フェスタ ▶ p.18
- ・「教育の魅力化」用語解説 ▶ p.19

大田市の「教育の魅力化」

今年度の取組の核となるもの

大田市ならではの教育の充実

教育資源を活かした
教育の推進
【ひと・もの・こと】

育てたい子ども像を共有

保幼小中高の連携

環境づくり

縦の連携づくり

「核となる3つの取組」

令和2年度の大田市の教育魅力化事業は、特に次の3つの取組を中心に進めることとしました。

1 教育資源を生かした教育の推進

これは、大田に生きる魅力ある「ひと」を通して、地域の教育資源「ひと」「もの」「こと」に出会う教育を推進することです。

このことにより、ふるさと大田に対する愛着や誇りを高めるとともに、本物に出会う体験を通して、学びに向かう意欲の高揚を図ります。また、これらの学習を通して地域の大人たちとのつながりを深め、ふるさとへの貢献意欲を育みます。

2 育てたい子ども像を共有する環境づくり

0歳～18歳までの子どもに関わる大田の大人が、同じねらいに向かって子どもたちに関わる環境づくりをすることです。それにより、さらに魅力ある教育を提供していきます。

3 保幼小中の縦の連携づくりの推進

子どもたちは、小学校に入学する前から地域と関わって学びを得ています。そこで、保育園・幼稚園・小学校・中学校・高校のそれぞれの施設・期間が相互に、子どもたちが発達段階ごとに学んだことを共有しながら、子どもたちを長い目で育てていこうと取り組んでいます。

0～18歳の子どもの育ちを系統的に整理した「子どもの育ちと学びのめやす」を活用しながら、保幼小中高の縦の連携づくりを推進していきます。

大田市では、平成28年に市外から迎えた人材を教育魅力化コーディネーターとして採用し、学校や地域とともに「教育の魅力化」に取り組み始めました。

現在、教育魅力化コーディネーターは、大田高等学校、邇摩高等学校、山村留学センターと教育委員会に常駐し、それぞれの学校で子どもたちに魅力的な教育が提供できるよう、学校と一緒に様々な取組を行っています。

また、今年度取組を進めていく上で大切にしたいことの1つに、取組の見える化を図ることがあります。よって、この事業報告書もその見える化の1つとして作成しました。次ページからは、この核となる3つの柱ごとに取り組んだ内容を記載しています。「大田市の教育の魅力化」に関わる取組について、この報告書を通して知っていただけたら幸いです。



【事業の目的】

探究活動を通して他者と協働しながら、社会との結びつきを実感し、自己を見つめ視野を広げることで、**自分の殻を破る。**

【今年度のトピック】

- ・「**地域体験学習**」
- …体験をとおして地域の魅力や課題を知る
- ・「**地域探究学習**」
- …地域をフィールドにしたプロジェクト学習
- ・「**ダイコウアワー**」
- …多様な価値観や生き方に会い、自分と向き合う

【今年度の成果】

- ・1年間の総合的な探究で関わっていただいた地域の方 **約80名**
- ・**生徒の変容**
- ・課題や魅力について、自分たちが**無知であること**に気付いた。
- ・課題について**当事者意識**がわいた
- ・プロジェクトで行動することをとおして、自分の**できることが増えた**、**自分について理解**を深めた。



【事業概要】

<「地域体験学習（1年）」体験をとおして地域の魅力や課題を知る>

地域体験学習は、3年間の基礎となる時間。様々な体験活動の中から自分で体験したいものを選択し、地域の魅力・課題・人に出会いました。体験を通して様々な形で社会と関わり、自分の可能性、視野を広げる時間になりました。またふりかえりをしっかり行い、体験したことを「楽しかった」「おもしろかった」で終わらず、それぞれ感じたことや気づきを学びに変えていきました。体験は全部で13プログラム。

(例)「アナゴの大田市を知ろう」アナゴをさばいたり、食したりしながら、大田の特産について考えました（協力：産業企画課・平和亭・旬岡富商店）

(例)「Webライターになってみよう」情報発信について学び、実際に大田で働く人たち取材し、記事作成し、発信しました。（協力：㈱フェズ、㈱アズム）

<「地域探究学習（2年）」地域をフィールドにしたプロジェクト学習>

大田高校では、毎年2年生が総合的な探究の時間に「地域探究学習」という授業を行っています。地域をフィールドに、テーマごとに自ら課題を見つけ、自分たちができる解決策をプロジェクトにしていく学習です。今年度は、「子育て」「多文化共生」「地域づくり」「教育」「観光」の五つのテーマから興味のあるものを選び、チームで取り組みました。「駅前の活性化」「大田のお土産を作ろう」など様々なプロジェクトが生まれました。地域の方に協力いただいた生徒も多くいました。学校の外に飛び出し、様々な方と出会いつながることで、大田の良さを感じた時間にもなりました。

(例)子育て【お兄さんとお姉さんと一緒に！】 コロナ禍の中で普段以上に「子どもたち遊べる場所が少ない」という課題を感じ、「イベントを自分たちで開く」を目標に、一から企画を考え、役割分担をして進めていきました。当日は12組の親子がイベントに来場。会場にはたくさんの笑顔が生まれました。

<「ダイコウアワー」多様な価値観や生き方に会い、自分と向き合う>

ダイコウアワーは大田高校の卒業生と共に企画した授業です。高校生が普段出会う機会の少ない近未来のロールモデルになりうる卒業生や島根と関わりのある方々と出会い、その人生観に触れたり、迷いや悩みなど普段考えていることについて考えたりする機会を通して、自分自身に向き合う機会になりました。

【担当者から一言】森下真穂（大田市教育魅力化コーディネーター大田高校担当）

今年度の総合的な探究の時間は、学校の教職員と地域の方が顔を合わせ、何回も打合せを行い、ともに悩みながら進めていきました。対話を重ね、大人も探究しながらよりよい学びの場をつくることができました。生徒達にとっても、自分自身の力を試す場所や自分の進路を考えるきっかけが、地域の中にあることを知った時間になったのではないかと思います。今後も、様々な方に力を借りながら学校・地域が協働し、コンソーシアムの動きともうまく絡めながら持続可能な学習にしていきたいです。

【来年度へ向けて】

- ・3年間の見通しと、校内体制の見直し
- ・コンソーシアムを有効に活用する

【事業の目的】

IT教育を通して、ITへの興味・関心を喚起し**論理的思考力**を育成する。
Society5.0で求められる人財を育てる。

【今年度のトピック】

- ・**プログラミング学習の実施**
- ・**IT講演会**
- ・2年生**理科**の課題研究のテーマに「プログラミング」を設定
- ・**IT国内合宿講習**

【今年度の成果】

- ・情報の時間を通して、**1年生全員がプログラミング講座を受講し**、アプリケーションや対戦型ゲームを作成。
- ・教育課程外の**プログラミング教室に計7名**、**IT国内合宿・講習に計2名**参加。



【事業概要】

<プログラミング学習の実施>

普通科はビジュアルプログラミング「スクラッチ」を使用し、アプリケーションや対戦型ゲームを作成しました。理数科はテキストコーディングを使用しオリジナルWebページを制作。この過程で論理的思考を身につけ、プログラミングの基本であるアルゴリズムを理解しました。

<IT講演会（富士通シニアエバンジェリスト・松本 国一様）>

数年前まで予想もされなかったことがICTによって既に現実化している。具体的にどんなシーンにICTが活用されているのか、これからどんな社会が実現するのかをお話し頂いた。

<2年生理科の課題研究のテーマに「プログラミング」を設定>

島根大学からの双方向オンライン授業によって研究に取り組んだ。

【担当者から一言】柳楽典雅先生（大田高校教員・IT推進チーム）

本校の本事業は今年度で3年目。情報の授業のほか、理数科の課題研究や部活動など幅広くITに触れる機会をつくることができました。生徒たちがITに触れるたびに表情がよくなっており、生活の中で共存、利活用していけるものだという理解や意識が高まったと感じています。

【来年度へ向けて】

- ・校内体制を見直し、学校全体でICT活用やハイブリット型授業展開に挑戦する。
- ・大田市内のIT企業との連携を図り、事業の継続を持続可能なものとする。

【事業の目的】

地域連携が必要な課題研究グループの伴走。

【今年度のトピック】

- ・文化系列で地域課題提供、生徒のグループ別の伴走
- ・道の駅でのメニューや商品の開発提案にむけた地域連携（生活系列、ビジネス系列）

【今年度の成果】

- ・コンソーシアム構築（道の駅との連携）とも結び付けることができた。

【事業概要】

<課題研究とは>

邇摩高校には5つの系列（農業、文化、ビジネス、生活、福祉）があり、3年生になると系列別に「課題研究」という授業があります。そこではグループ、または個人でテーマを設定し、系列に沿った研究に取り組んでいきます。

今年度の課題研究テーマは全部で42個あり、12月には校内発表にて系列代表者が決められます。各系列の代表に選ばれたテーマは下記のとおりです。

- | | |
|--------|---|
| 文化系列 | 「大森町発展計画」 |
| 農業系列 | 「生姜の更なる利用法（食品製造モデル）」
「シクラメン品質向上にむけた取組（園芸モデル）」 |
| ビジネス系列 | 「あなごおにぎりを広めよう Part 2！」
「SNSを使って地元を知ってもらおう！」 |
| 生活系列 | 「園外保育を安心・安全にするためにできること（保育モデル）」
「地元がつまったスイーツ！～新メニュー開発～（食物モデル）」
「イメージを形にしたドレス製作（被服モデル）」 |
| 福祉系列 | 「高齢者における水分補給の必要性と、その方法について
～祖母が自分からお茶を飲むようになるために～」 |

<課題研究とコーディネーターの関わり>

学年全体では約40テーマあるため、コーディネーターが全ての系列・グループに関わることは難しいです。そのため、お声がけいただいた系列やグループの伴走を行っており、今年度は文化系列に関わりましたが、コンソーシアム構築の中で道の駅との連携があることから生活系列（食物モデル）と農業系列とも関わりました。

<文化系列での伴走方法>

文化系列は他の系列とは違い実業系ではなく、主に進学を目指す系列です。課題研究では専門分野がないため、まず地域課題を知るところから始まります。そこで、これまで地域との関わりから得た魅力や地域資源、地域課題を、『第二期 大田市まち・ひと・しごと創生 総合戦略』を参考に分野別に伝えました。

生徒は自分たちの興味関心からテーマを設定していきますが、文化系列では「大森町発展計画」「図書館の利用促進」「仁摩町の魅力マップ制作」の3つのテーマ・グループができました。コーディネーターの生徒との関わりは、部分的ではありますが、生徒が研究を進めていくために地域の人や団体と繋いだり、研究を進めていくのにアドバイスをしたりしました。

<伴走事例>

■文化系列「大森町発展計画」

最初は、生徒の「どうしたら大森町に貢献できるのか」「自分たちも大田高生のように、大森町のお店のメニューを外語表記するような取組がしてみたい」などの気持ちがきっかけでした。そこから、研究内容や検証方法を決めていくところで伴走を行い、高校生が大森町のガイドを務めることで大森町の魅力を市内外の方に伝え、自分たちも町のことを知る機会にもなるのではないかと、という仮説を立てて検証していききました。生徒は夏休み期間に石見銀山ガイドの会が行う「ガイド養成講座」を受け、実践・習得していききました。

実践では、大田市の公民館や中高生地域貢献グループ「大田JOいんつ♪」の協力を得て、検証を行いました。2回目の検証は、その場で観光客の方に声を掛けガイドをさせていただき、実施しました。

■文化系列「仁摩町の魅力マップ制作」

生徒は地域の具体的な魅力・観光的資源を知るところから始まり、各所を回って、マップをどのように作り上げるのかを一緒に考えていきました。途中、観光協会の方にアドバイスをいただく機会をつくることもありました。また、マップのデザインはパソコンを使って行いましたが、生徒もこれまでの授業の中で習っていない技術が必要でしたので、今ある機材環境の中でアドバイス等を行いました。

■ビジネス系列「あなごおにぎりを広めよう Part 2！」

昨年度の卒業生の研究「あなごおにぎりの商品化」を受け継ぎ、バージョンアップさせたグループです。商品化に向け味付けを数パターン考え、【試作→試食・アンケート→検証】を繰り返し、販売活動も行っていました。コーディネーターとして、ここまでの過程では関わりはありませんでしたが、道の駅との連携から新しい商品（お菓子）の開発に繋がるのではないかと、おにぎりから煎餅を作れないかと考え、生徒とともに試作活動を行いました。その際、機械を貸していただける場所について、大田市産業企画課にも相談し、進めていきました。

■ビジネス系列「SNSを使って地元を知ってもらおう！」

研究自体には関わっていませんが、生徒が研究活動をきっかけに県内アーティストのミュージックビデオに出演することができ、ミュージックビデオ制作者との連絡調整や撮影時のサポートを行いました。

【担当者から一言】岡田真理子（大田市教育魅力化コーディネーター邇摩高校担当）

すべての系列に関わることはとても難しいですが、実業系でない文化系列だからこそ、コーディネーターにできることがあったのかもしれない。また、系列の授業担当の先生方との連携はとても重要だと感じました。伴走することで、より生徒と関わる機会をいただけたことに感謝しています。ありがとうございます。

【来年度へ向けて】

- ・各系列の課題研究担当者と年度始めに、コーディネーターの関わり方を相談することが必要。
- ・コーディネーターは、コンソーシアムのWGとも上手く紐づけながら課題研究に関わる必要がある。



大森町発展計画の実践の様子



仁摩の魅力を発信するためのマップづくりに向け、大田市観光協会を訪問

【事業の目的】
連歌を切り口に温泉津と銀山の関わりや温泉津の魅力について知る。

【トピック】
連歌から地域のひと・もの・歴史を知って体験し、動画で発信。

【今年度の成果】
様々な人、団体がつながったことで幅広い活動となった。



【事業概要】
温泉津小の6年生が、小学校での石見銀山学習の締めくくりとして、「連歌」をメインテーマに据えた学習に取り組みました。

まず、子どもたちは、二度にわたって温泉津の町並みを歩き、地域の魅力を再発見しました。そのうちの、二度目の町歩きの際に、石見銀山資料館の館長さんや各見学地の方からお話を聞く中で、和歌の上の句と下の句を交互に作って詠み合う連歌会が、かつて温泉津で行われていたことを知ります。

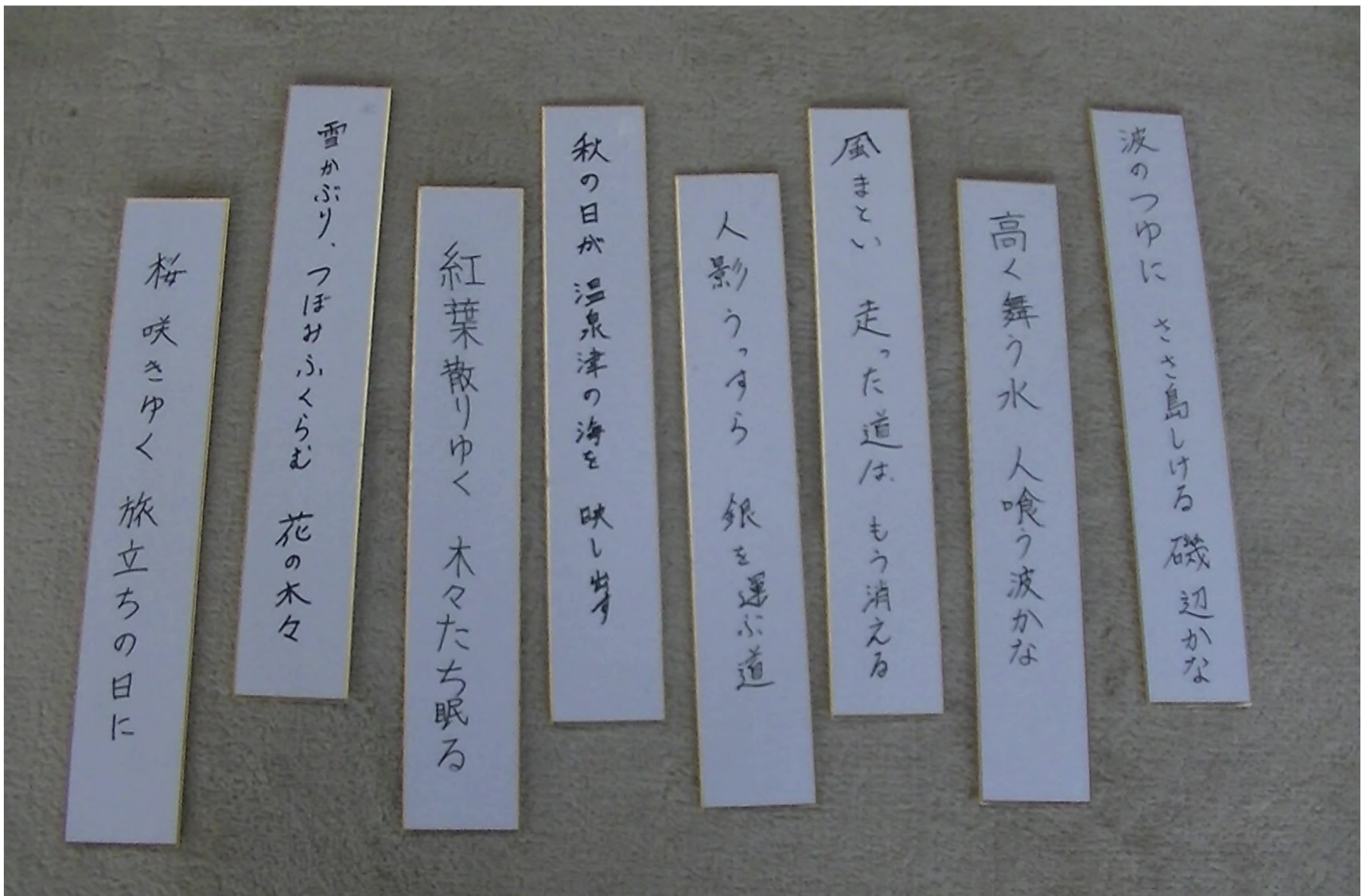
その後、自分たちも講師の方から作法などを教わり、実際に連歌にチャレンジしてみようという活動に取り組みます。3～4名からなる子どもたちのグループに地域で活動されている短歌サークルの方々から1人ずつ加わり、一緒に短歌を実践する時間を3回体験しました。普段から歌を詠まれている方々のアドバイスは的確で、子どもたちの悩みどころに届くものばかりでした。初めは歌を詠むことの難しさを実感していた子どもたちも、この3回の体験を通して、より楽しめるようになっていました。

そして、最終的な学習のまとめとして、温泉津の町をロケ地に、連歌を活かした町への提案動画を撮影し、地域で見られる機会をつくることになりました。温泉津の町並みを移動しながら、視聴者への呼びかけをしていくチームと、かつて連歌会が行われていたお寺を会場にして、実際に連歌を詠むチームに分かれて収録しました。

温泉津の魅力を再発見するとともに、昔の町の姿に思いを馳せ、それを踏まえて現在に目を向けて、提案活動までが行われました。

【担当者から一言】 新和也（大田市教育魅力化コーディネーター 小中高連携担当）
6年生担任の先生と相談しながら、町歩きや連歌実践の授業のフォローや地域の短歌サークルの方々との連携、提案動画の収録と動画に使う素材集め等に関わりました。特に印象的だったのは、概要でも記載した、子どもたちが連歌に挑戦している時の様子です。初めはとっつきづらく、難しそうなお顔も見られましたが、次第に楽しさが大きくなっていく様子が感じられました。最後の動画撮影では、地域のことや卒業を控えた自分たち自身のことを盛り込んだ歌が詠まれましたが、その実践の積み重ねや短歌サークルの方々の声掛けの影響が大きかったと思います。

【来年度に向けて】
より効果的なコーディネーターの動き方や関わる形を考える。



【事業の目的】

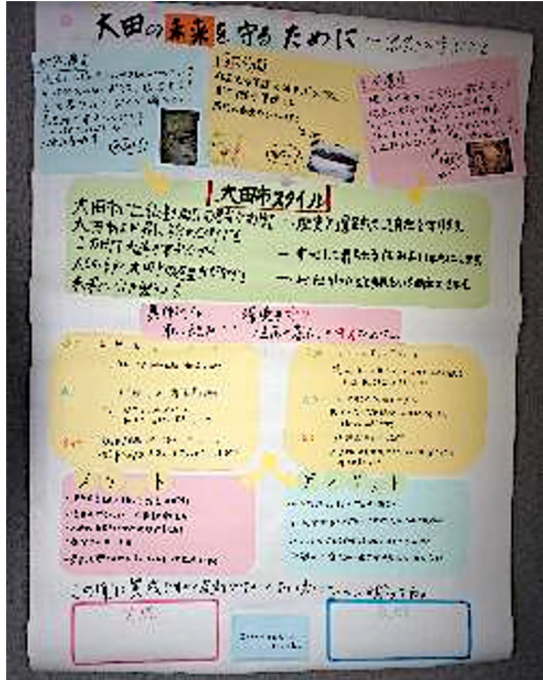
職場体験が中止となっても、この代替学習を良い機会として、大田の良さを再発見する。

【トピック】

大田の良さを改めて知り、地域へ発信。

【今年度の成果】

- ・職場体験の代わりになる活動の事例を一つつくる事ができた。
- ・大田市概論と4分野を合わせて、バラエティに富んだ9名の講師を迎える事ができた。
- ・成果物を地域に掲示させていただき、入場制限のあった文化祭以外の機会にも見ていただけた。



【事業概要】

中止となった今年度の中学生職場体験の代替活動として、大田西中3年生は、「地域の未来を考えよう」と題し、大田市の歴史、文化・産業、観光、環境の4分野を取り上げて、調べ学習を行いました。

4分野に分けたといっても、1つの分野でも取り扱える要素は幅広くあります。そのため、それぞれの分野から一つ切り口を提示するという意味合いで、温泉津の歴史、新設される道の駅、旅行業の仕組み、琴ヶ浜の環境保全に関する講話と、それらの前に、「大田市概論」として、市の基本的な情報と現状の課題について知る機会を設けました。その結果、様々な角度からリアルな話を聞くことができ、その後の調べ学習につながるような時間になりました。

それらの講話を踏まえて、調べ学習を行ったまとめとして生徒が作成した最終成果物は、地域への提案性を持ったものとなりました。3学期には、学校周辺の公共施設に掲示し、地域の方の目に触れる機会をいただきました。

【担当者から一言】新和也（大田市教育魅力化コーディネーター 小中高連携担当）

職場体験の代替学習について、学年部の先生方と意見交換した結果、市全体のことを改めて調べたり、知った内容をもとに発信したりする活動をするという方針が固まりました。調べ学習の前に、インプットする機会を持つべく、各分野で講話を依頼しました。当日に向けては、講師の方の資料等の準備に伴走しました。学校として生徒たちに伝えてほしいこと・ねらいと、講師の方が伝えたい内容を合わせてお話しいただくことができました。また、今年度は文化祭の入場制限を設けたこともあり、その代わりとして成果物の掲示により、中学生の様子を地域に伝える機会を持てた点も良かったです。

【来年度に向けて】

市全体での今年度の職場体験の中止に伴った活動であり、その状況で活動の形が変わることが予想される。



【目的】

生徒が日々生活している身近な地域と石見銀山との関わりについて知る。

【トピック】

身近な地域と銀山の関わりを現地で学ぶ。

【今年度の成果】

- ・銀山学習にふるさと学習の要素を含める事ができた。
- ・学校側と地域側で双方が持つ意図を両立させる事ができた。



【事業概要】

大田西中1年生の銀山学習では、例年、石見銀山に関する現地学習の候補地になっている世界遺産センターや石見銀山資料館に加え、学校の周辺地域で学ぶコースを設けました。

地域の方から事前にお聞きした意見を踏まえて、仁摩町から馬路地区、温泉津町から湯里・西田地区を取り上げさせていただきました。現地学習にあたって、石見銀山ガイドの会、銀山街道を守る会の方に案内を依頼しました。具体的な内容としては、銀山最盛期に使われていた街道跡を、観光客が歩けるように橋を架けたり、看板を掲示したりするなどの環境整備活動についてお話を伺うことができました。

石見銀山の歴史や当時の文化などの過去について学ぶと同時に、これからどのように世界遺産を守っていくのかという未来を考えるきっかけにもなりました。

【担当者から一言】新和也（大田市教育魅力化コーディネーター 小中高連携担当）

銀山学習担当の先生からの、学校の近くで銀山に関する現地学習ができないかという要望がきっかけとなり、今年度の銀山学習に組み込むこととなりました。地元ではない地域のことを学ぶ生徒にとっては、新しいふるさと学習の機会と捉えることもできます。今回意識したのが、地域の皆さんが中学生に伝えたいことを現地学習の中をしっかり取り入れることでした。講師の方には、自身が行っておられる活動のこと、それにかける思いや地域の状況を長年見てきたうえで中学生に知ってほしいことを、現地学習の時間の中で伝えていただきました。

【来年度に向けて】

銀山との関わりという点を考慮すると、取り上げる地域に偏りが出てくる可能性がある。



【事業の目的】

ウィズコロナの時代に、大田市の自然や固有な歴史・文化等の特色をネット上で自由に学べるシステムを構築し、大田市の魅力を市内外に伝え、「わが里大田」に対する愛着と誇りを育てる。

【今年度のトピック】

- ・具体的な生の交流ができていくコロナ禍での現実と、来年度から実施されるGIGAスクールを踏まえ、子どもから大人までが大田市の自然や固有な歴史・文化など様々な特色をネット上で自由に学べるシステムを構築する。
- ・ふるさとへの愛着や誇りを高め、地域を支える次世代の育成を進める「ふるさとのひと・もの・ことを学ぶ学習や活動（小中学校のふるさとキャリア教育を含む）」の一助となる。

【今年度の成果】

- ・来年度から実施されるGIGAスクールを前に、教育委員会主導で、ウィズコロナの時代に学校および家庭でふるさと大田をネット上で学ぶことができる教材をつくることができた。
- ・子どもたちにとってより身近で興味が持てる教材にするために、大田高校の授業で使ってもらい、高校生から意見を求めることができた。

【事業概要】

今年度は、大田市におけるこれまでの先人の貴重な取組や足跡、各校の子どもたちが長年取り組み、全国的に評価されている自然保護活動を広く発信し、ふるさと・キャリア教育の教材として活用するとともに、教材開発のヒントとします。

【具体的な内容・教材】

(1) 大田市に伝わる昔話（大森編）の電子書籍化

- ・昭和11、12年に大森尋常小学校に勤務された上橋先生が当時の子どもたちと共に収集した昔話に、現大森小児童の挿絵を加え、電子書籍化。
- ・東京在住の脚本家 佐藤万里先生による全体監修とあとがき執筆を依頼。
- ・大田高校生による授業活用と意見交換。
- ・「大田市小中学校教育サイト」にアップする。

(2) 市内小学校が取り組んでいる絶滅危惧種の保護活動（ヒロハノカワサイコ編）

- ・池田小における保護活動、その経験を県弁論大会で発表したOBの作文、大田の自然を守る会の会長インタビューを加えて編集し、YouTubeで配信。
- ・大田の自然を守る会（伊藤宏会長）による制作協力および監修依頼。

【担当者から一言】 武田祐子（大田市教育魅力化主任コーディネーター）

今年度制作の本教材、今後継続して制作されるであろう教材等により、子どもたちや市民がふるさとを深く知り、学び、さらには市外の方々に広く発信することで、「わが里大田」に誇りをもち、世界との繋がりを意識しつつ、未来に向かって持続可能な社会を築いていこうとする気概を育むことを期待しています。

【来年度に向けて】

今後は、市教研や各校、市内サークル等と連携して、この教材の有効な活用について現場での実践を積んでいきたい。また、あわせて継続した教材づくりに取り組んでいく必要がある。



一、むかし

むかしむかしある村に、何十年が間、住職のおらない荒れた寺がありました。

あるとき、ひとりの武士がその村を通りかかって、茶店の主人に

「あの寺はどういうわけで、あんなに荒れているのか」

とたずねました。茶店の主人が言いますには、

「あの寺には夜な夜な【毎晩】変化【妖怪やおばけ】が出ますので、だれも住む者がおりません。それであのように荒れてしまいました」

「よし、それではわしが寺に泊まって、変化を退治してやろう」

武士がすぐさま立ち上がったのを見て、茶店の主人はあわてました。

「お武家さま、おやめなさいませ。これまでもそのようにおっしゃって、変化を退治しに行かれた方がおりますが、ひとりとして無事に帰ってこられた方

はありません」

けれども武士はよほど腕に自信があるの

か、茶店の主人がとめるのをふりきって、

寺へ出かけていきました。



【事業の目的】

高校生と地域の大人が共に育つ地域、
教育コミュニティをつくる。

【今年度のトピック】

- ・「**出会い**」地元企業訪問や
ゲスト講話など、様々な人と交流！
- ・「**話す**」出会った人たちと
自分のことや地域のことについて対話。
- ・「**踏み出す**」高校生主体のプロジェクトが
多数立ちあがる！

【今年度の成果】

○ダイコウラボに参加した生徒の割合
R1:10% → R2:15% のべ100人

○ラボの実施回数

- 9月：1回
 - 10月：4回
 - 11月：2回
 - 12月：4回
 - 1月：2回
 - 2月：2回
 - 3月：3回
- 合計18回実施

- ・高校生が「行動」する人数
今年12人（目標：5人以上）
- ・地域ラボの開催数 2回（昨年1回）
11/10 島根中央信用金庫（大田営業部）
12/18 石見銀山生活文化研究所
- ・他課との連携→産業企画課、医療政策課

○生徒の変容

- ・他人事、不満から「**じぶんごと**」へ。
- ・自分の生き方、キャリアの選択肢が広がる、
明確になる、「**地域**」が**選択肢**に入る。
- ・「**やってみたい**」「**やってみよう**」の
ハードルがさがる。
- ・**自分に自信が持てる**。

【事業概要】

ダイコウラボは、放課後の時間を使って、多様な出会いの機会やそこに集まった仲間や地域の大人との対話等を通して、高校生たちが考える身の回りの課題解決や「こんなことやってみたい」という思いの実現を目指しています。

一昨年度より取り組んでいるこの事業で休校期間にオンラインラボを行い、今年度は9月より、正式にスタート。参加生徒作成のラボのプロモーションビデオにより初めての参加者が増えました。

<ダイコウラボで大切にしている3つの機会>

「**出会い**」

ゲストには、島根大学の大学生や島根大学医学部教授、他校のコーディネーターなど、たくさんの方にきていただきました。また、学校を飛び出し、地域の企業への訪問も実施。島根中央信用金庫や石見銀山生活文化研究所、カフェごはん・リードに訪問。また、他校とのリモート企画も実施し、学校の中だけでは出会えないたくさんの人たちに会い、多様な価値観、生き方に触れる機会となりました。

「**話す**」

様々な人と出会い、様々なテーマで話します。地元企業の方とは「キャリア」「働く」といことテーマにしたり、ゲストの方が来ているときには、ゲストが活躍している分野に関するテーマで話したりしました。また高校生が話したいテーマを掲げて話すこともあり、それぞれの思いや価値観を共有する機会となります。

「**踏み出す**」

ダイコウラボをきっかけに高校生主体のプロジェクトがたくさん生まれました。
例) 大田市のお土産を地元企業と一緒に作る
例) LGBTQについて、映画をとおして考える企画
例) 学年を越えたチームで、地域イベントの企画・運営
それぞれのプロジェクトを通して、生徒たちが一歩踏み出しました。

【担当者から一言】森下真穂（大田市教育魅力化コーディネーター大田高校担当）

ダイコウラボは、生徒、地域の方、関わっていただいたみなさんと一緒に場をつくり育ててきました。自分の思いを言葉やプロジェクトで表現する生徒の姿は、本当にエネルギーであふれています。「こんなことやってみたいです！」「こんなことができるようになりました」「自分がこんなふうになりました」と話してくれる生徒たちをととても誇りに思います。これからも多くのみなさんとダイコウラボを通して一緒に学び合い、この場を育てていけたらと思います。

【来年度に向けて】

- ・ダイコウラボに参加していた卒業した生徒達が継続して関われる機会をつくる。
- ・情報発信に力を入れ、新たな仲間づくりと持続可能な体制づくりを行う。



【事業の目的】

- ・大田市内外の小中学生に三瓶山をはじめとした**大田市の自然体験**を提供する。
- ・**都市と農村**の交流。
- ・山村留学をきっかけにした、大田市の**関係人口**を増やす。

【今年度のトピック】

- ・コロナ禍により、県外からの子どもや親の**移動に対策**が必要だった。
- ・コロナ禍により、数多くの体験事業が**中止、縮小**となる。

【今年度の成果】

- ・長期山村留学では全国から**13名の小中学生**（第17期生）を受け入れ。
- ・短期山村留学は**夏・春が中止**、**冬は県内限定**で小規模開催。

【事業概要】

大田市の山村留学は、平成5年から短期、平成16年から長期の事業が始まりました。大田市教育委員会が管理運営主体。子どもの指導は、公益財団法人育てる会に委託し、指導員が派遣されています。平成28年より教育魅力化コーディネーターを配置（西嶋CO）し、情報発信を強化しています。

現在までの山村留学の参加者は、延べ数で、短期山村留学生は6000人以上、長期山村留学生は200人以上となっています。従来の目的であった都市農村交流に加え、近年では、関係人口づくりの役割も注目されています。市内の子どもたちも短期事業や週末の体験等に参加し、普段は味わえない大田市の自然を体験してもらっています。近年、大阪出身の第1期の卒業生2名が、結婚し北三瓶に定住。その他の卒業生も北三瓶のお世話になった農家さんと連絡をとり続けるなど、山村留学をきっかけにした地域内外を結ぶネットワークが構築されています。

また、県立高校による生徒の全国募集事業の「しまね留学」とも連携しています。高校の募集イベントに山村留学も出店するほか、山村留学生在が、高校も島根を選ぶケースが増えています。大田高校へ進学した山村留學生も生まれました。短期事業も非常に盛況です。令和元年度には、夏の山村留学の65名の定員が、受付開始2週間で満員となりました。情報発信が充実したことによって、これまでの広島や大阪など近くからだけでなく、関東圏や海外在住の日本人の問い合わせ、参加者が増えています。Facebookの購読者数は、山村留学関係で日本一となり、令和元年度には、年間50万ビューを記録。全国でも屈指の自然体験施設となっています。

令和2年度は、コロナ禍を受けて事業の大幅な変更、縮小、中止を数多くの場面で決断せざるを得ませんでした。そのなかでも、子どもたちにとって、保護者にとって、地域にとって、学校にとっていい方法を模索しながら、事業を実施しました。

【担当者から一言】西嶋一泰（大田市教育魅力化コーディネーター 山村留学担当）

大田市の山村留学は、高校の「しまね留学」が始まる以前から、全国の子どもたちを島根に受け入れてきた歴史ある取り組みです。近年は全国や海外からも注目され、多くの問い合わせがよせられています。今年度はコロナ禍により思うように事業が行えないこともありましたが、大田の地域資源を存分に活かしたこの取り組みを市内外の方にもっともっと知ってもらいたいと思います。

【来年度へむけて】

子どもたちがホームステイをする受け入れ農家さんの高齢化が課題です。地域の方々あってこそその山村留学ですので、引き続き、地域の方々と連携しながら、大田の自然や魅力を体験する活動を推進していければと思います。



【事業の目的】

コロナ禍に対応するため、様々な事業をオンラインで開催。

【今年度のトピック】

- ・入園のつどい・収穫祭をインターネット中継。
- ・大田市初のオンライン授業を実施
- ・オンラインでの説明会・面接の実施。

【今年度の成果】

- ・行事をインターネット中継したことで、保護者以外の祖父母親戚も視聴可能に。
- ・オンライン説明会を17回開催。
(接触機会の確保)
- ・来年度の長期山村留学生は15人。
(この10年で最多)

- 06/28 しまね留学合同説明会
- 07/05 山村留学センター説明会
- 07/12 山村留学センター説明会
- 07/25 地域みらい留学フェスタ
- 07/26 地域みらい留学フェスタ
- 08/09 山村留学センター説明会
- 08/23 地域みらい留学フェスタ
- 09/13 地域みらい留学フェスタ
- 09/27 山村留学センター説明会
- 10/11 山村留学センター説明会×2
- 10/31 しまね移住フェス
- 11/22 山村留学センター説明会×2
- 11/28 しまね移住ワンダーランド
- 12/20 山村留学センター説明会×2

【事業概要】

＜修園入園のつどい・収穫祭のネット中継＞

4月、東京など感染拡大地域から保護者が来園するのが難しくなったため、入園のつどいは、Youtube liveでのインターネット中継にて実施。2つのカメラをビデオスイッチャーで切り替えながら、臨場感のある映像を発信しました。収穫祭も同様に配信。保護者やセンターとの連絡をZOOMで行うなど、オンラインを用いて子どもたちの様子を伝え、来園できない保護者とのコミュニケーションをとっていきました。

＜大田市初のオンライン授業の実施＞

夏休み、冬休みに長期山村留学生が帰省から、山村留学センターへ戻ってくる際に、センターの施設内での2週間の待機期間を確保するために、北三瓶小・中学校と、山村留学センターを繋いだオンライン授業を計画・実施しました。山村留学センターに待機している子どもたちは、学年ごとに6部屋に分かれ、北三瓶小中学校の教室と繋がりました。機材準備やシステム運用なども学校側と調整を行いながら、手探りで改善していきました。期間は、1回目が8月26日～9月1日。2回目が1月12日～15日。回線契約、表示機器、マイク、スピーカー、ZOOM側の設定、子どもと先生とのルール策定など課題や改善点も多いですが、待機期間のなかでも授業を受けることができました。

＜オンライン説明会＞

例年行っていた「しまね留学合同説明会」や「Uターンフェア」等の通常説明会は、全て中止になりオンライン化しました。引き続き、しまね留学や地域みらい留学、ふるさと島根定住財団と連携しながら、イベントに出店していきました。ただし、オンラインでの集客が未知数であったため、大きなイベントの前後にも回数多く個別の説明会を開催することで、少人数ながら確実にアプローチを行うことができました。また、体験留学や施設見学が難しいために、VR施設見学動画や説明動画も制作し活用していきました。さらに、面接もオンラインで開催。こうした対応の結果、今年度は13人だった長期山村留学生は、来年度は15人と、ここ10年で最多となりました。

【担当者からひと言】西嶋一泰（大田市教育魅力化コーディネーター 山村留学担当）

コロナ禍ではありましたが、オンラインでできることを模索し続けた1年となりました。これまでの経験で身につけたオンライン配信やウェブミーティングの運営の経験を活かして、従来目指してきた山村留学の魅力をもっと多くの人に伝え、山村留学のファンとなってもらう活動をなんとか続けることができました。

【来年度へむけて】

来年度は約5年間続いたコーディネーターが終了し、情報発信等も節目を迎えます。山村留学のファンは確実にいますので、ぜひ引き続き、発信を続けられたらと思います。コロナ禍は今後どうなるか読めませんが、今年度のオンライン対応は一つの先例として選択肢に常に入れながら、事業推進に臨んでいければと思います。



【事業の目的】

学校・地域での共通理解がもてる協働体制を構築し、生徒の成長と地域の活性化を目指す。

【今年度のトピック】

- ・校内魅力化研修会や、生徒会との意見交換会の実施。
- ・地域の方との意見交換会の実施。
- ・コンソーシアム設立準備委員会の実施。

【今年度の成果】

- ・研修、意見交換会の実施。
- ・校内魅力化研修会（全教職員参加）を年間で6回実施。
- ・地域の方との意見交換会の実施。（約40名の地域の方が参加）
- ・グランドデザインの完成。
- ・大田高校コンソーシアムの設立。

【事業概要】

<校内魅力化研修会や、生徒会との意見交換会の実施>

校内魅力化研修会では複数回にわたり、まずは、大田高校の教職員が、大田高校の課題を踏まえながら、「身に着けたい力」や「学校と地域が協働してできること」のアイデア出しなどを行ってきました。その結果、

育てたい生徒像：「自分自身で、決める・語る・動くことができる生徒」
身につけさせたい力「自己理解力」「批判的思考力」「対話的表現力」「主体的行動力」

が決まりました。

また、生徒会の意見交換会の中では、学校内の活動と上記の力を紐づけて考え、大田高校の活動を整理し、学校の活動について見直しました。

<地域の方との意見交換会>

大田高校に関係する様々な立場のみなさんに集まっていただき、大田高校の現状を共有し、今後の学校と地域の協働について考える意見交換会を実施しました。議題は、①学校と地域が協働してできること②大田高校の子どもたちを育てるための目指す地域の姿について。これらについて小グループになり、様々な意見を出し合いました。①については、小中高の連携事業や地域の行事に関わることの意見が多く出ました。②については、「関心を持ち続ける」「楽しそうな大人がいる」「失敗させる」「あいさつ」「つなぐ、つながる」などのキーワードが出ました。

これらの会をとおして、グランドデザインが完成し、大田高校のコンソーシアムが設立されました。

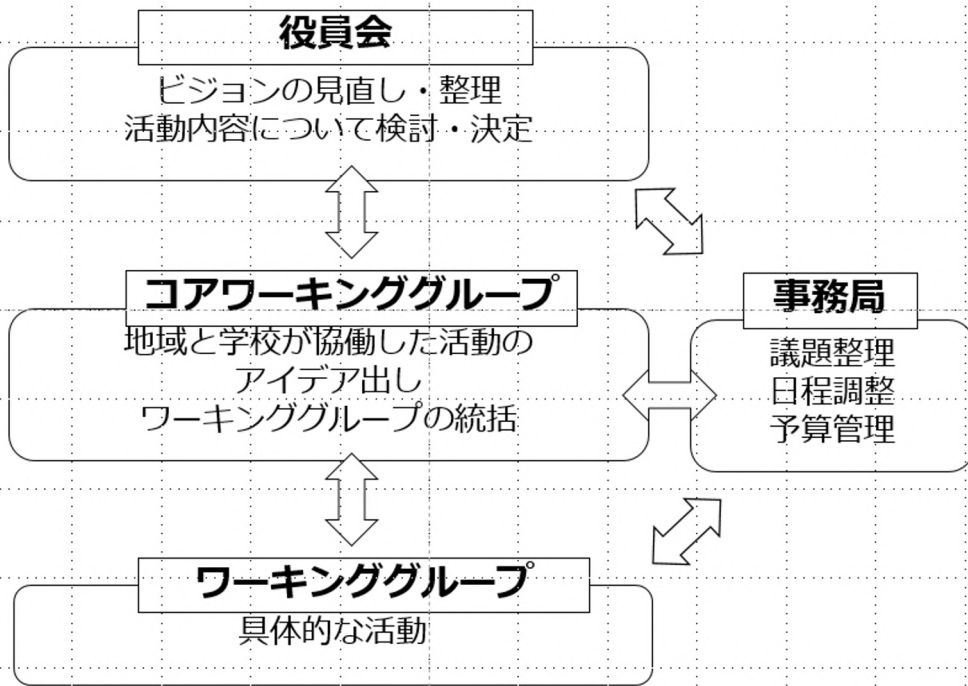
【担当者から一言】森下真穂（大田市教育魅力化コーディネーター大田高校担当）

今年度、大田高校のコンソーシアム構築に向けて、校内、校外でたくさんのお話し合いを重ねてきました。特に、地域の方との意見交換会では、多くの方に大田高校の魅力化について共に考えていただき、熱い思いを交わす時間になりました。この思いを重ね合い、生徒、学校、地域それぞれにとってよい機会が生まれるよう形にしていけることがコンソーシアムの大切な役割だと思えます。今後も対話を重ね、学校と地域の協働を目指していきたいと思えます。

【来年度へ向けて】

- ・コンソーシアムが有機的に動くように、ワーキンググループを動かしていく。
- ・年に数回は、大田高校を応援してくれる全員の方の思いを共有する場をつくる。

組織図



【事業の目的】

瀬摩高校魅力化コンソーシアムの構築。

【今年度のトピック】

- ・校内研修の実施。
- ・ワーキンググループ5つにあたる事業推進。
- ・ワーキンググループづくりに向けた各所との連携活動。

【今年度の成果】

- ・瀬摩高校コンソーシアムの設立。
- ・令和4年度に向けたグランドデザイン案の作成。
- ・ワーキンググループづくりに向けた地域との関わりの実践。

【事業概要】

＜どんなコンソーシアムを構築したいか＞

瀬摩高校は総合学科としての魅力を向上させていくために、様々な取組を進めてきましたが、より組織として推進しやすくなるようにしようと考え、ワーキンググループ（以下「WG」）を入れたコンソーシアムの構築を考えてきました。

瀬摩高校魅力化コンソーシアムの目的は、「地域貢献のできる人材の育成」と「学校の存続」です。現在、瀬摩高生の進路は進学者と就職者が半々ですが、しっかりと社会の中で働いていける、あるいは、それによって地域貢献につながるよう育成することが瀬摩高校の使命だと考え、総合学科ならではの学びによって将来の様々な職業を考えることができる機会をつくることや、地元就職者の増加を意識しています。

また、コンソーシアムの基本姿勢を「形だけでなく、実際に動ける組織であること」「既存事業の取組に重きを置き、充実させる」としています。瀬摩高校は過去にも「瀬摩高校活性化プラン」を作成し、学校の未来を描き、たくさんのことにチャレンジしてきましたが、一方で教員の疲弊という課題もありました。そこで、3年前からこれまで積み上げてきたことを一旦整理し、行事と学びの内容、組織体制を大きく変化させてきました。そういったこれまでの積み上げを大切にしながらも、形だけでないコンソーシアムを作ろうということになりました。

＜5つのWG＞

実際に動ける組織をつくるために、5つのWGを作りました。

また、グループごとに校内で担当を振り分けています。

- ・総合学科実践 …総合学科ならではの学びの整備
- ・道の駅との連携 …道の駅「ごいせ仁摩（R3年秋完成予定）」と連携した学習づくり
- ・生徒確保、校種間連携 …生徒が出張授業を行う「アンバサダー事業」や、近隣の小中学校と連携した学習づくり
- ・労働環境の改善 …総合学科ならではの多忙・多忙感を解消するための、教職員がゆとりを持てる環境づくり
- ・生徒の主体的な学校づくり…生徒会活動をはじめ、生徒が前面にできることのできる環境づくり

＜できることから＞

既存の取組をどうやって地域と連携していきながら進めていけるのかを模索し、まずは「道の駅」との連携を始めることになりました。瀬摩高校には、5つの系列（農業、文化、ビジネス、生活、福祉）があり、3年生になると系列別に「課題研究」という授業があります。そこではグループまたは個人でテーマを設定し、系列に沿った研究に取り組んでいきます。生活系列（食物モデル）の課題研究では、道の駅でのメニュー開発提案をしたいグループを募り、3グループが挑戦しました。価格設定や売り方・パッケージまでは出来ませんでした。開発途中で職員の方々に試食・アドバイスをいただき、発表会でも提案を聞いていただくことができました。

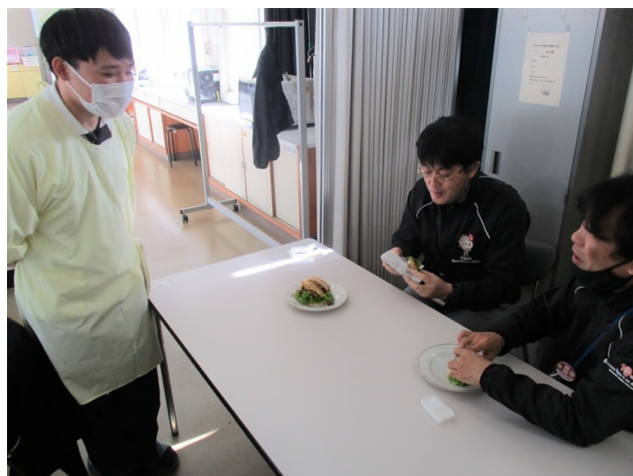
【担当者から一言】岡田真理子（大田市教育魅力化コーディネーター 瀬摩高校担当）

最初は何から始めればよいのかわかりませんでした。先生方と話し合いながら進めることで、ここまでやってこれました。

実際に道の駅推進室と連携をしてみて、「関わっていただきながら瀬摩高校について知っていただくことの重要性」を強く感じました。話し合うことも大切ですが、実際に授業や活動に入って見ていただく・関わっていただくことで、瀬摩高校をより深く知っていただけたと思います。少しずつでも、学校と地域それぞれにとってプラスになる関係性を構築できるようにしていきたいです。

【来年度へ向けて】

- ・校内外ともに、意見交換・情報共有の場を年に数回設定する。
- ・先生方が業務過多にならないようにする。



意思共有の場



事務局

ワーキンググループ

WG ① 総合学科実践

WG ④ 労働環境の改善

WG ② 道の駅との連携

WG ⑤ 生徒の主体的な学校づくり

WG ③ 生徒確保・校種間連携

【事業の目的】

学校と地域が連携・協働して学校運営に取り組む「地域とともにある学校づくり」を進めるため。

【今年度のトピック】

- ・志学小中学校が学校運営協議会を設置し、コミュニティ・スクールとなる。
- ・未設置校へのヒアリング及び市内既設置校への視察を実施。
- ・既設置校の学校運営協議会への参加。
- ・令和3年度学校運営協議会の設置予定校5校。

【今年度の成果】

- ・未設置校における課題などの実態把握を行い、実施にむけて検討。
- ・地域に応じた取組が進められるよう、現場の声を反映。



学校運営協議会委員と生徒とのワークショップ



学校運営協議会の様子

【事業概要】

<コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）>

コミュニティ・スクールは、学校運営協議会を導入した学校のことを指します。学校と地域住民・保護者等が力を合わせて学校の運営に取り組む「地域とともにある学校づくり」をより推進するための仕組みです。

近年、急激な社会の変化に伴い、学校や地域を取り巻く課題は複雑化・多様化しています。そうした状況の中、未来の担い手となる子どもたちに必要な資質・能力を育むために、学校と地域が連携・協働して、子どもたちの成長を支えていくことが必要となります。

学校運営協議会を導入することにより、子どもたちに「どんな力をつけるのか」という目標やビジョンを学校と地域で共有し、「そのために学校・家庭・地域ができることは何か」と具体的な方策を考えるなど、学校運営に地域の声を積極的に生かすことができます。それにより、地域と一体となって、特色ある学校づくりを進めていくことができます。

大田市では、現在8校がコミュニティ・スクールとなり、来年度は、五十猛小、北三瓶小・中、池田小、川合小でも学校運営協議会が導入されます。令和4年度には市内全域に広げ、学校と地域とで連携・協働して子どもたちの学びや成長を支える土壌がより豊かになることを目指しています。

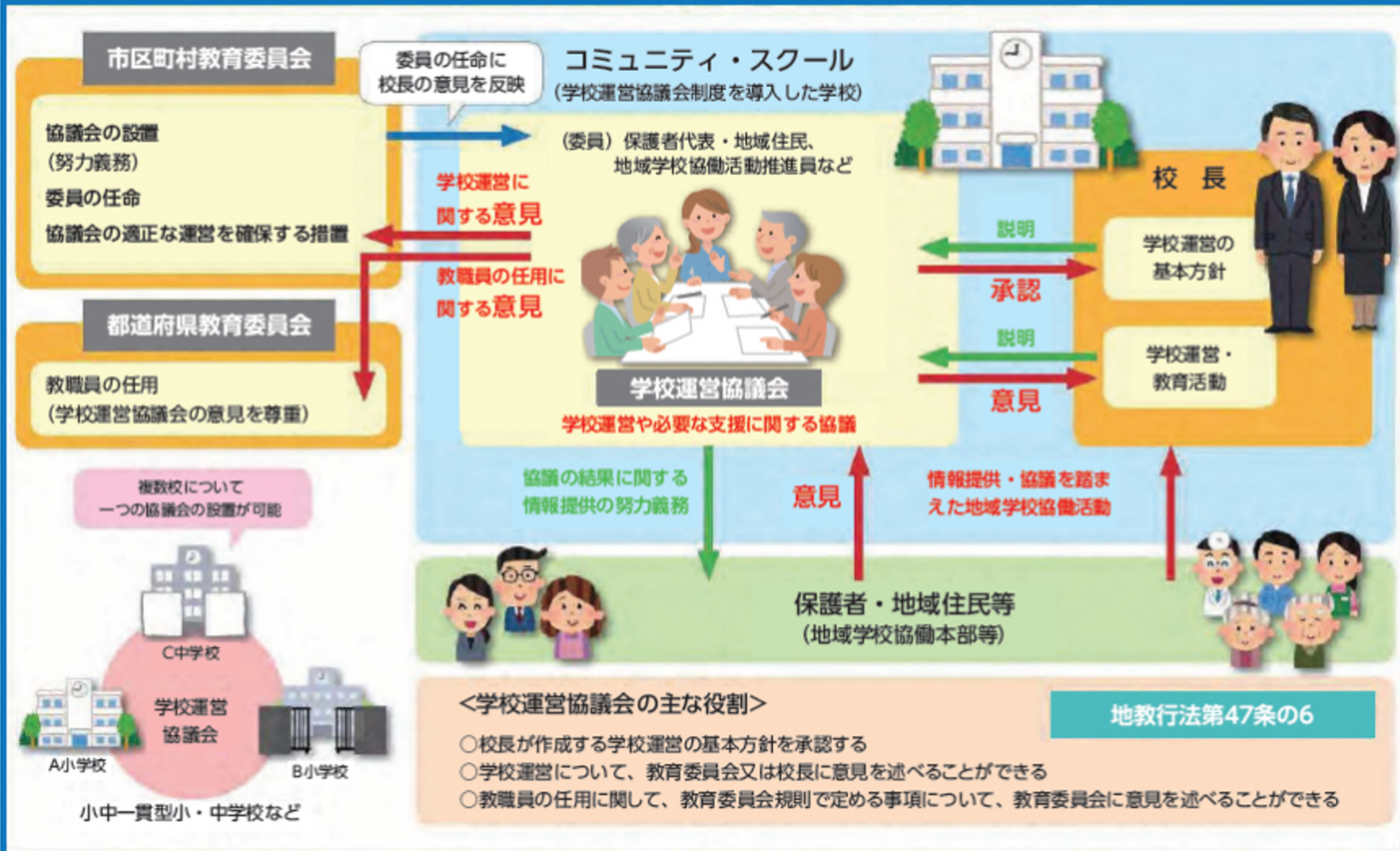
【担当者から一言】石橋圭子（派遣社会教育主事・教育魅力化推進係）

今年度は、私自身、コミュニティ・スクールとは何かを理解するところから始まりました。様々な学校の学校運営協議会を見させてもらう中で、地域の方々の学校や子どもたちに対する熱い思いをととも感じています。学校と地域が一緒になって子どもにどのような力をつけたいかを共有し、そのための具体策を協議できるところに学校運営協議会の良さがあるのではないかと感じています。

【来年度へむけて】

- ・令和4年度には、市内全域に広げられるよう、各校の実態に応じながら、設置にむけて取り組んでいきたい。
- ・学校運営協議会の意義や委員の役割等について説明を行う。

コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）の仕組み



【事業の目的】

めざす子ども像を共有しながら、学校・家庭・地域が連携・協働する体制づくりを整備することで、**地域の教育力向上**を図る。

【今年度のトピック】

- ・地域学校協働本部の体制について計画を作成。(R4年度から導入)
- ・公民館や小学校、中学校に計画と方針の説明。
- ・地域学校協働活動についてのリーフレットの作成。

【今年度の成果】

- ・来年度、市内7つの公民館が事務局を担いながら、5つの地域学校協働本部を立ち上げる計画を作成。
- ・学校支援本部事業と放課後子ども総合プラン推進事業の整理。
- ・学校運営協議会の設置時期との連動。

【事業概要】

＜地域学校協働活動と地域学校協働本部＞

地域学校協働活動とは、地域住民・保護者・企業等の幅広い地域住民等の参画を得て、地域全体で子どもたちの学びや成長を支えるとともに、「学校を核とした地域づくり」を目指して、学校と地域が相互にパートナーとして連携・協働して行う様々な活動のことで、例えば次のような活動があげられます。

- 学びによるまちづくり・地域課題解決型学習・郷土学習
- 放課後子供教室 ○家庭教育支援活動 ○学校に対する多様な協力活動 など

これらの活動を推進していくためには、

- ①「支援→連携協働」(学校との関係性の強化)
- ②「個別→総合化・ネットワーク化」(活動に関わる人同士のつながりの強化)
- ③「学校運営協議会との連携」(目標やビジョンの共有化)

を図ることが必要です。そのために地域学校協働本部を整備し、幅広い地域住民や団体等の参画により形成された緩やかなネットワークを構築していくことが重要になってきます。

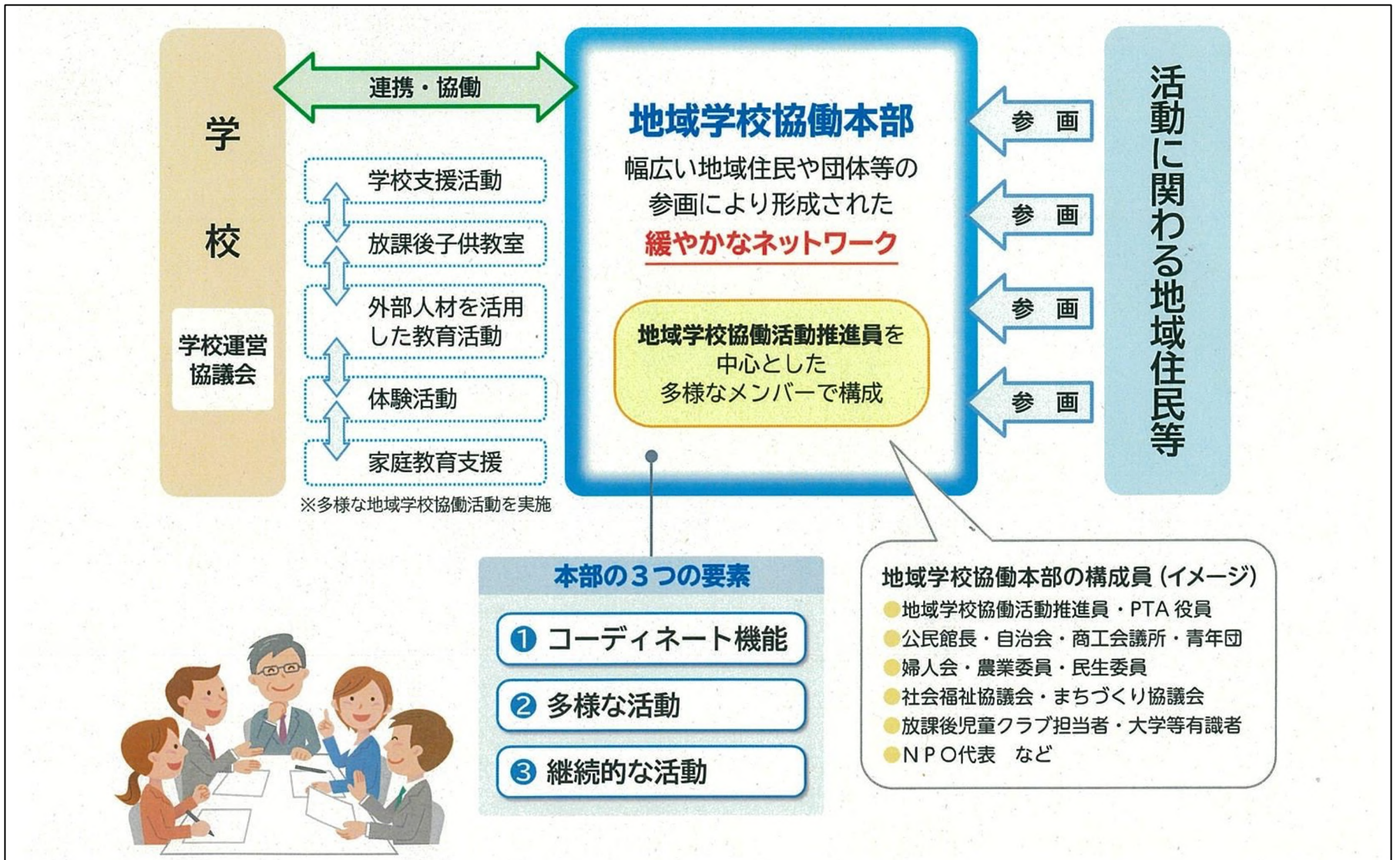
大田市では、平成20年に導入された「学校支援地域本部事業」と平成22年に導入された「放課後子ども総合プラン推進事業」を基盤としながら、令和3年度より5つの地域学校協働本部へと移行します。

【担当者から一言】岩谷和樹(派遣社会教育主事・社会教育課)

法令や国・県の様々な資料を紐解き「地域学校協働活動」とは何かを考え、課内で議論を重ねてきました。当初は、学校で行われるふるさと教育や学校支援活動のみといったイメージでしたが、放課後支援など学校と連携・協働した幅広い活動が「地域学校協働活動」として位置づけられていることが分かってきました。それと同時に「地域学校協働活動」は社会教育の取組の中のほんの一握りの部分でしかないことも分かってきました。学びと気づきの大切さを改めて実感した1年でした。

【来年度へむけて】

- ・新年度の公民館職員や専任CO、学校への周知。
- ・学校運営協議会と地域学校協働本部が連携した具体的な活動の支援。



【事業の目的】

市内小中高校の教員がオンライン会議システムの活用について知識・技能を高めるとともに校種間の連携を深める。

【今年度のトピック】

- ・地元IT企業を本研修の講師に依頼。
(基本操作、ミーティングアプリの特徴とZoom実技、トラブル対処、セキュリティー等)
- ・市教研メディア教育部と協力の上、事前アンケートや1回目終了時のアンケートを実施し、その結果を踏まえ実態に即した内容で大田高校と邇摩高校の2会場で実施。

【今年度の成果】

- ・初めて小中高の教員を対象にした合同研修が実施できた。
- ・市教研と連携し、タイムリーな研修ができ、参加者にもたいへん好評であった。
- ・研修内容については、市内学校を対象にした事前アンケートを参考に検討した。
また、1回目終了時に受講生対象にしたアンケート結果をもとに2回目を修正して実施し、より実態に即した内容で実施できた。

【事業概要】

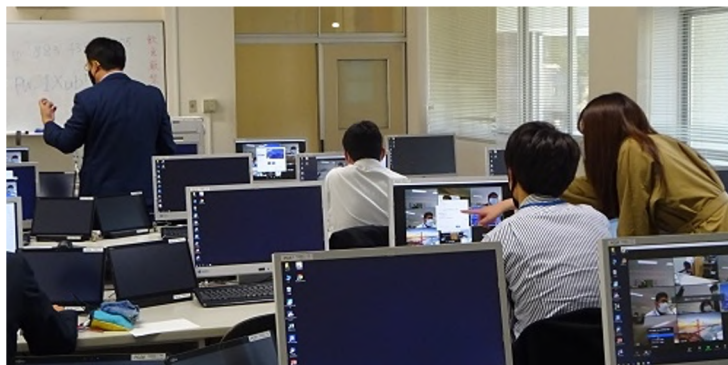
コロナ禍の中で、教育現場でもオンライン授業や会議等のニーズが高まってきた現状を踏まえ、この機を逃さず、現場のニーズに応えるため、オンライン会議システム研修会を小中高合同で実施しました。

【担当者から一言】武田祐子（大田市教育魅力化主任コーディネーター）

市教研メディア教育部と協力して学校現場のニーズを把握する事前アンケート等を実施し、それをもとに、産業企画課・IT企業にも加わってもらって研修内容について検討しました。また、コロナ対策を念頭に、両高校を会場として、20人程度でタイムリーに研修できました。今後も横の連携を大切に、現場のニーズに合った事業を展開していきたいと思えます。

【来年度に向けて】

- ・GIGAスクール実施の来年度以降も継続した研修会の開催が必要である。



【事業の目的】

邇摩高生の課題研究について聞き、地域と自身のかかわりについて考える。

【今年度のトピック】

2年連続の邇摩高生による成果発表と、系列変更に伴う学校紹介。

【今年度の成果】

2年続けて、中高生の関わりの機会を持つことができた。

【事業の概要】

大田西中2年生は、邇摩高校で行われる学習成果発表会に参加する予定でしたが、新型コロナウイルスの影響から参加を見送ることになりました。その代替わりとして、3年生の生徒と先生方を中学校へ招き、成果発表と学校紹介をしていただきました。

発表は各系列1組ずつの計5組で、様々な分野で取り組まれた研究の成果が発表されました。各チームが自身の生活に身近なテーマや、大田市の特産品・観光地に関するプロジェクトに取り組み、得られた成果をお聞きすることができました。

学校紹介に関しては、今回の授業の対象となった中学2年生が入学する年度から、邇摩高校の系列編成が変わることもあり、教務部の先生から、そのことも含めて学校紹介をしていただきました。

また、質疑応答の時間もあり、中学生から高校生に質問が投げかけられました。中学生にとっては、高校生が自分の言葉で研究成果や学校生活について話す様子を見る貴重な機会となりました。

【担当者から一言】新和也（大田市教育魅力化コーディネーター 小中高連携担当）

2年連続での実施となりました。昨年度は中学生のグループワークに高校生が加わる形で意見交換を行いました。今年度は、前に出ている高校生に対して、中学生が質問をする質疑応答という形で、意見交換をすることとなりました。中学生からは、課題研究に関する質問だけでなく、高校生活に関する質問もありました。それらに対し、高校生は自身の言葉で丁寧に答える姿が印象的で、とても頼もしく映りました。

【来年度に向けて】

- ・中高双方にとってより良い効果を出せる機会にする必要がある。



【事業の目的】

大田市の就学期を迎えた児童が、どこかの保育所(園)・幼稚園または在宅から入学しても、スムーズな学校生活が始められるように『大田市版スタートカリキュラム』を策定する。

【事業概要】

○『スタートカリキュラム』とは

小学校へ入学した児童が、幼稚園・保育所・認定こども園などの遊びや生活を通じた学びと育ちを基礎として、主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を創り出していくためのカリキュラムです。

平成29年3月に告示された学習指導要領では「(前略)特に、小学校入学当初においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと」として示されました。よって各学校ではスタートカリキュラムを作成していく必要があります。(～幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につなぐ～「スタートカリキュラム」編成・実施のために平成31年2月 島根県教育委員会より)

○経緯

大田市では、平成29年度『大田市統一カリキュラム 子どもの育ちと学びのめやす』を策定しました。これは、保育所(園)・幼稚園・小学校・中学校・高等学校の滑らかな接続を目指したものです。この『大田市統一カリキュラム 子どもの育ちと学びのめやす』では、特に就学期(小学校1年生前期)を遊びや生活をとおして総合的に学んでいく幼児期から、各教科等の学習内容を系統的に学んでいく学童期への円滑な接続が求められる重要な時期と位置づけています。

この度、この就学期の学びについて、各小学校が保育所(園)・幼稚園並びに保護者と共通理解のもと、具体的に取り組めるよう『大田市版スタートカリキュラム』を策定することにした。

○事業の流れ

1 市内の取組について実態把握

(1) 各校における『スタートカリキュラム』についてアンケートの実施(小学校)

(2) 資料収集 市内小学校で作成されているスタートカリキュラム(小学校)

(3) 『大田市統一カリキュラム 子どもの育ちと学びのめやす』についてアンケート実施(小学校・保育所(園)・幼稚園)

2 アンケート結果の整理と『大田市版スタートカリキュラム』について検討(学校教育課)

【今年度の成果】

○アンケート結果から以下の実態がわかった。

- ・学校はスタートカリキュラムの必要性を感じており、ほとんどの学校ですでに作成されている。
- ・各校のスタートカリキュラムを活用することで、多くの児童は徐々に学校生活に適応し、スムーズなスタートが切れている。
- ・スタートカリキュラムを週報として各家庭に配布することで、保護者への安心感や協力体制につながっている。
- ・学級担任にとっても、入学後児童と学校生活にどのように慣れさせていくのかがわかり、指導の見通しがもてる。
- ・低学年の担任だけでなく、教職員で共通理解を図る必要がある。
- ・複数の保育所(園)等から入学してくるため、各保育所(園)等との連携を図る手立てを考える必要がある。
- ・小学校(4～5月)のスタートカリキュラムに向かって就学前(9～3月)のアプローチカリキュラムについて共通理解をしていけると、スムーズな育ち・学びにつながると考える。

○アンケート結果を受けて

『大田市版スタートカリキュラム』について検討したところ、すでに多くの小学校で自校のスタートカリキュラムの作成と活用が行われていることが分かった。当初『大田市版スタートカリキュラム』策定の計画だったが、引き続き各学校の実態に即したカリキュラムによって実践していただくことが、より児童のスムーズな学校生活を支えるものとなるだろうと判断。よって、各小学校に以下の通り通知した。

1 作成について

- ・スタートカリキュラムは、各学校で作成する。

2 活用について

- ・実践しながら、実態に合わせて加除修正する。

3 連携について

- ・保育所(園)・幼稚園等との情報共有に努める。

例) 保・幼・小連絡会等の機会をとらえて、「スタートカリキュラム」をもとにして話し合う

4 大田市統一カリキュラム『子どもの育ちと学びのめやす』との関連性について

- ・就学期のページは、「スタートカリキュラム」をイメージしたものである。
- ・各学校の作成及び加除修正の際に参考にさせていただきたい。

【担当者から一言】 武部理恵(学校教育課 主任)

『大田市版スタートカリキュラム』策定事業をとおして、『スタートカリキュラム』『大田市統一カリキュラム 子どもの育ちと学びのめやす』の作成や活用状況について把握することができました。今後は、市内の各保育所(園)・幼稚園・小学校が、情報共有や連携について具体的に進めていくことで、子ども達が安心して就学期のスタートを過ごしてほしいと願っています。

【来年度に向けて】

見直しの時期を迎えている『大田市統一カリキュラム 子どもの育ちと学びのめやす』を通して、特に保育所(園)・幼稚園・小学校・中学校・高等学校の連携等について検討する。

【事業の目的】

大田の子どもたちの活躍と
教育に関わる魅力的な取組について広く知ってもらおう。

【今年度のトピック】

メディアを通して、0歳～18歳までの
教育に関わる取組を配信。

【今年度の成果】

大田公式YouTubeチャンネルの公開が2月末のため、
3月末を感想・アンケートの締め切りとしております。

【事業概要】

<第2回 おおだ教育の日リモートフェスタを開催>

大田の子どもたちの活躍と教育に関わる魅力的な取組を皆さんに知っていただくため、令和元年度から「おおだ教育の日フェスタ」を開催しています。初めての開催となった昨年度は、県立男女共同参画センター「あすてらす」を会場に各種表彰やふるさと教育に関わる発表、展示などを行いました。

今年度は、新型コロナウイルス感染の拡大防止のため、集客する形での開催は断念したが、映像の配信による開催に切り替えて、ぎんざんテレビや大田市公式YouTubeチャンネルで大田市の教育に関わる取組をお届けしました。

<主な内容>

- ・さまざまな場面で活躍した大田の子どもたちの
児童・生徒の表彰や最優秀作品の紹介
- ・作文コンクール最優秀賞の朗読
- ・幼稚園や保育園で、様々な遊びや生活体験を通して
子どもたちが学ぶ様子
- ・学校での地域資源を活かした学習の様子
(町たんけん、石見銀山学習、地域探究学習、課題研究など)
- ・山村留学センターでの個人発表や太鼓の発表
- ・中高生の地域活動グループ「JOいんつ♪」の活動紹介
- ・給食センターの取組
(小学生と給食調理員との交流や給食時間の様子紹介)

<配信>

●ぎんざんテレビ(ケーブルテレビ局)

【期間】令和3年2月8日(月)～13日(土)

15日(月)～20日(土)

全日18時放送開始(10分のリピート放送)

土曜日のダイジェスト版は60分のリピート放送

●大田市公式YouTubeでの配信

令和3年2月22日(月)～

【担当者から一言】

石橋圭子(派遣社会教育主事) 山崎勲(派遣指導主事)

昨年度から始まった「おおだ教育の日フェスタ」。今年度は新型コロナウイルスの感染拡大防止から集客することを中止し、配信することで大田市の教育の魅力を知っていただくことに切り替えました。人が集うことで生まれる新たな学びや発見もありますが、配信にすることでより多くの人にまた、市内問わず大田市の教育について知っていただく機会をもつことができたと思います。

【来年度へ向けて】

- ・今年度の感想をもとに成果を整理し、できるだけ早くから
企画立案に取りかかりたい。
- ・配信による開催の良さもあるが、情報の流れが一方向になりがちである。
その改善等も含めて検討していきたい。



はなれていても、こころつながる
2021
おおだ教育の日
リモートフェスタ
Remote Festa

今年のおおだ教育の日フェスタは催しではなく
大田市の子どもたちの活動の様子を
ぎんざんテレビ・YouTubeでお届け!
みんなで集まることのできないこんなときだからこそ、
教育でみんなのこころはきっとつながる!
2月はぎんざんテレビ・YouTubeでおおだの教育を楽しもう!!

2 ぎんざん11ch
月のおおだ教育の日フェスタ放送スケジュール

8日(月) 大田市教育委員会表彰・鈴木賞
9日(火) 久手幼稚園・大田幼稚園の取組
遊びや体験をとおしての学び
～地域の方との交流や表現活動の様子～
10日(水) 温泉津小・大森小・久手小の取組
ふるさと教育や世界遺産学習などの様子
11日(木) 大田高校・暹摩高校の取組
地域探究学習や課題研究などの発表
12日(金) JOいんつ♪紹介動画
みんなと一緒に楽しい給食(川合小学校)
15日(月) 「ふるさとそして未来」作文コンクール
16日(火) 人権作文(小学校の部)・人権ポスターコンテスト
17日(水) 人権作文(中学校の部)・人権標語コンテスト
18日(木) 保育施設の取組
遊びの中での学び「元気に育て おおだっ子」
キラキラすまいる☆おおだっこ(体操)
19日(金) 山村留学センターの取組
センター紹介/取組の個人体験発表/北三瓶っ子太鼓クラブ
土曜日にダイジェスト版を放送 13日(土)・20日(土)
全日18:00放送開始(10分のリピート放送/ダイジェスト版は60分のリピート放送)
※ダイジェスト版のオープニングとクロージングは一中生徒会が行います。

大田市公式の
2月22日よりYouTubeチャンネルでも配信!!
YouTubeチャンネルは大田市HPからご覧ください。
番組のご感想・ご意見はこちらから▶

お問い合わせ/大田市教育委員会 学校教育課 TEL 0854-83-8179



おおだ教育の日リモートフェスタ チラシ

大田市Youtube

アンケートフォーム

「教育の魅力化」用語解説

【教育魅力化コーディネーター】

島根県における「教育の魅力化」事業のキーパーソン。県内では約40人のコーディネーターが教育魅力化のために活動中。活動内容や雇用形態は様々。学校の総合的な学習の時間に関わったり、学校経営そのものに重要な役割を果たしたり、部活動や寮中心に活動するコーディネーターもいます。雇用形態も様々。大田市の場合は、事業開始時の平成28年度は大田市の地域おこし協力隊として採用され、会計年度任用職員として活動しています。市町村の雇用ですが、席は各学校にある場合が多く、行政・学校・地域の間を奔走しています。なお、略称はCO。

【高校魅力化コンソーシアム】

和訳すると共同事業体。島根県が推進する高校魅力化事業における用語。目標やビジョンを、地域の住民や市町村、小・中学校、社会教育機関、地元企業等と高校とが主体的・創造的な対話を行いながら協働で策定し、地域と一体となって子供たちを育む「地域とともにある学校」をつくるための、協働体制。簡単にいえば、高校経営を、高校だけではなく、地域のいろんな人を交えてする体制のことです。

【探究学習】

探究学習は、自ら課題を設定し、解決に向けて、情報を収集・整理・分析したりしながら進める学習活動のことです。生徒の自ら学び、自ら考える力の育成をめざします。

【コミュニティ・スクール】

コミュニティ・スクールは、学校運営協議会を導入した学校のことを指します。学校と地域住民・保護者等がともに知恵を出し合い、学校運営に意見を反映させることで、一緒に協働しながら子どもたちの豊かな成長を支え、「地域とともにある学校づくり」をより推進するための仕組みです。CSとも呼ばれます。高校におけるコンソーシアムで構築される協働体制とも重なる部分大きい制度です。

【しまね留学】

島根の県立高校を中心に行っている生徒の全国募集事業。一部私学や小中学生対象の場合もあります。東京・大阪等で説明会を開催。近年はプラットフォームが主催する全国の公立高校の生徒全国募集イベント「地域みらい留学フェスタ」と併催されています。

【山村留学】

1968年に長野で始まった都市と農村の子どもたちの交流事業。大田市では、1993年から小中学生向けの山村留学事業を行っています。夏休み等に行われる5日間の短期山村留学や、北三瓶小中学校に転入し、1年単位で自然体験活動を行う長期山村留学事業を実施しています。

【ふるさとキャリア教育】

大田市が推進する小・中学校における教育事業。地域の教育資源を活用し、子どもたちの地域づくりに向かう意欲の高揚につなげていく活動。

【キャリア・パスポート】

文科省が推進する小中高で一貫的に行われるキャリア教育事業。子どもたちが自分のキャリア意識を常に振り返ることができるポートフォリオ（ノート）を持つことで、キャリアに対する考え方や意識を向上させます。

【子どもの育ちと学びのめやす】

大田市が平成28年、29年度策定した、0歳から18歳までの子どもたちが健やかに伸びていく姿を示したものの。子どもの発達段階に応じて付けたい力や関わり合い方等を示しています。

【地域学校協働活動】

「地域と学校とが連携・協働して地域全体で未来を担う子供たちの成長を支えていく様々な活動」の総称。国が示している活動は「学校支援活動」「放課後子ども教室」「土曜日の教育活動」「学びによるまちづくり」「地域社会における地域活動」等があげられています。

【地域学校協働本部】

「地域学校協働活動」の推進に当たり、幅広い地域住民や団体等の参画により形成された緩やかなネットワークで、「コーディネート機能」「多様な活動」「継続的な活動」の3つの要素があります。

おわりに

令和2年度の総括として1年間の教育魅力化推進係の取組を活動報告書にまとめました。この報告書を最後までご覧ください、誠にありがとうございました。これまで、各教育魅力化コーディネーターを中心に様々な取組を進め、その取組を通して学校・家庭・地域が出会い、対話し、一緒に活動し、少しずつではありますが、着実に繋がりが広がっています。この繋がりを生かして、子どもたちにさらなる魅力ある豊かな学びを提供することができるよう、今後も立ち止まることなく取組を進めて参ります。

この報告書に係るお問い合わせがありましたら、お気軽にご連絡をお願いします。今後とも大田市の教育魅力化にご支援、ご協力を賜りますよう、どうぞよろしくお願いいたします。



大田市教育魅力化プロジェクト令和2年度活動報告書
令和3年3月発行

〔発行先・問い合わせ〕

〒694-0064 大田市大田町大田口1111番地
大田市教育委員会 学校教育課
教育魅力化推進係
TEL 0854-83-8179
o-kyomiryoku@city.ohda.lg.jp



Facebookでも情報発信中
<https://www.facebook.com/ohda.kyouiku/>